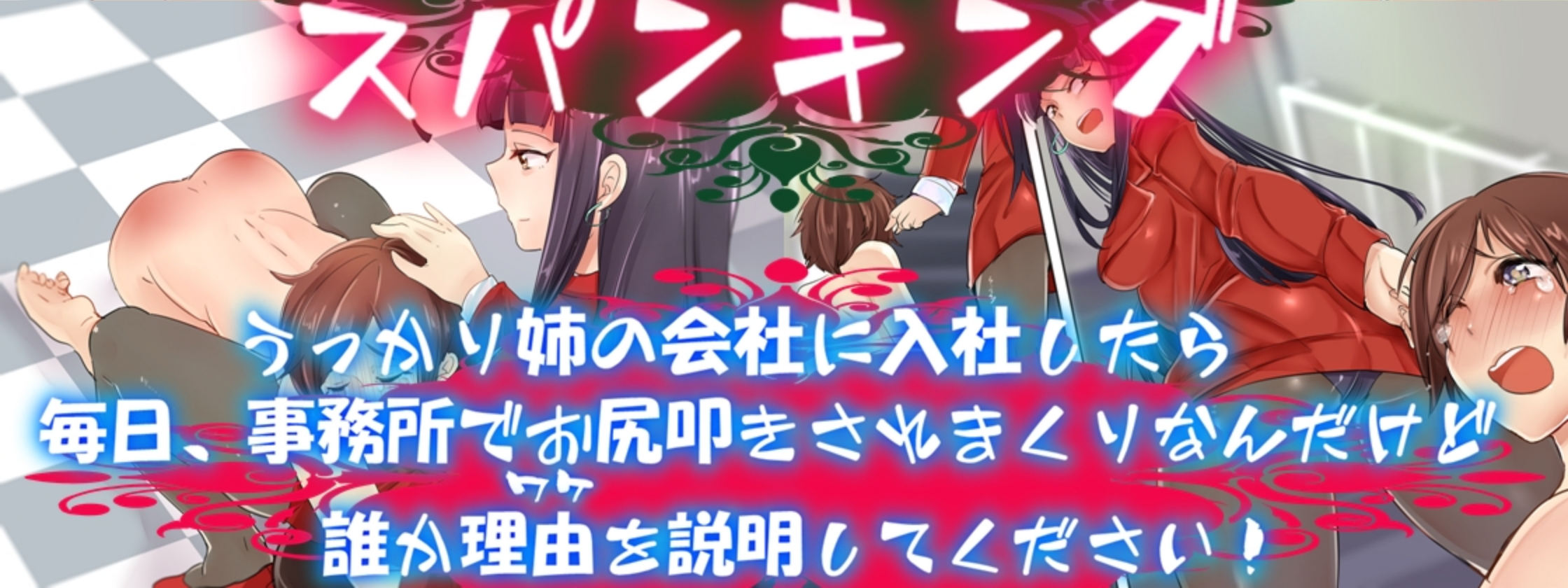




オフィス スパンキング



うっかり姉の会社に入社したら
毎日、事務所で尻叩きさやまくりなんだけど
誰か理由を説明してください！

姉が起業した。
化粧品フリームの製造販売会社だ。

僕には関係の無いこと。

そうは行かなかった。

大学を卒業すると同時に、

半ば無理矢理入社させられてしまったのだ。

それから、入社してすぐに分かった。

姉の会社には女性社員しかいない。

男性が僕の他には誰も居ないのだ。

そんな僕に与えられた仕事は、『営業』。

僕は、姉の

「良い成績をあげたらラジ褒美として、即取締役」

という言葉に乗せられて、頑張った。

でも、男の僕がいくら売り込んで

女性用化粧品フリームなんて売れるはずもなかった。

そして姉は僕に言った。

「いくら可愛い弟でも、営業成績が悪かったら罰を与えるぞ」

正直、「冗談だと思った。
単なる脅しだ」と。
でも僕はその日を迎えてしまった。

「かやいそうだけど見せしめの意味も込めて、
恥ずかしくお仕置きを受けてもらうやあ」

僕はその日の朝礼で、
他の社員も見ている前で、
姉にズボン而降ろさせ、
パンツを剥ぎ取らせ、
お尻を突き出すように机の上に突っ伏して、
罰を受けた。

お尻叩きの騒ぎ...





チャージャー!

「やめて、お姉ちゃん！
お尻を叩かないで！
お願いだから！」

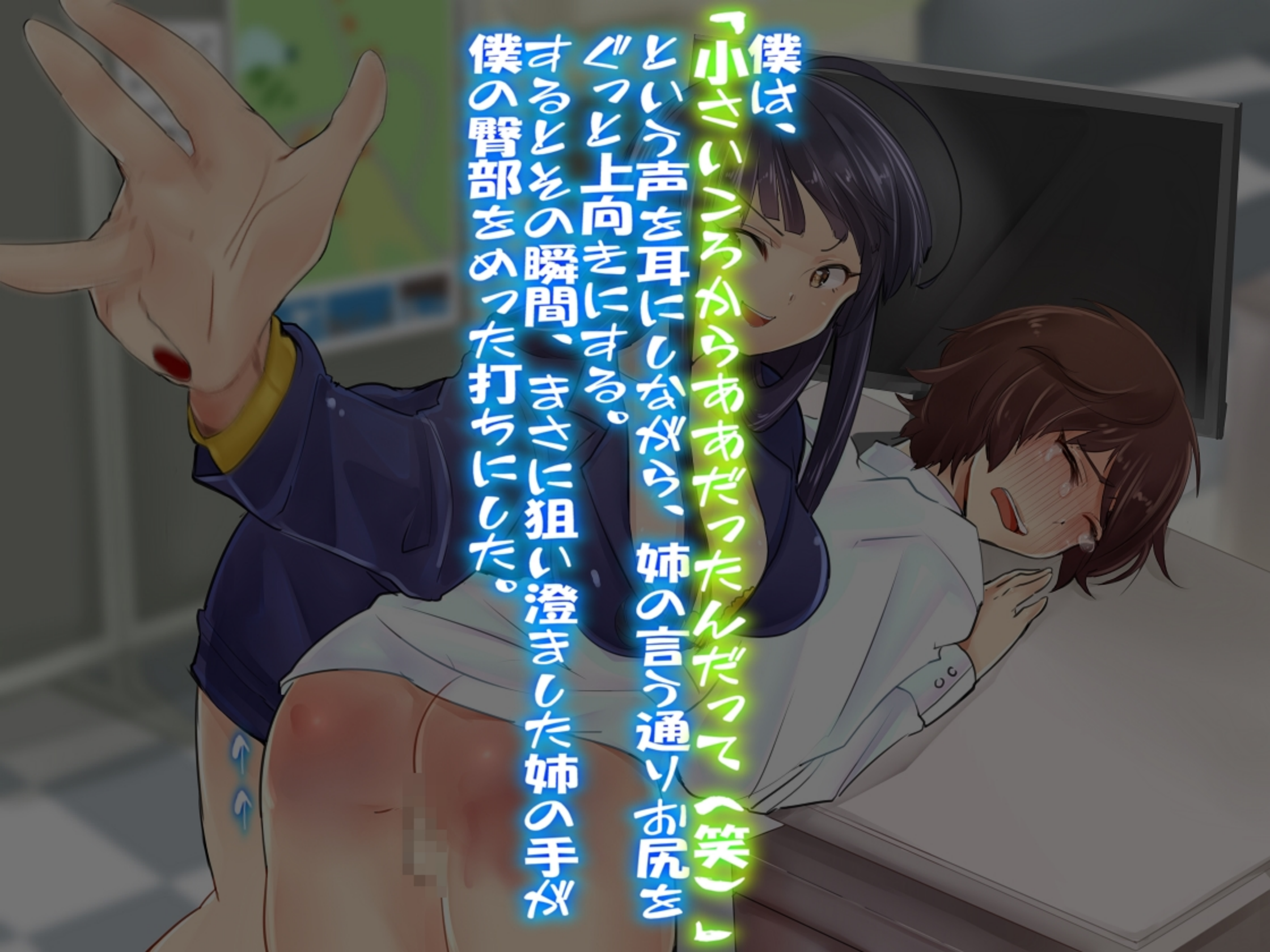
「ダメよ。
約束したでしょ？
営業成績がこのままだったら、
お尻叩きの罰を与えるって。
社長が約束を破る訳にはいかないの。
分かるよね？」



「でも…こんな…こんな…恥ずかしいわね…」

「そんが良いのよ。
たっつっつぷり、恥ずかしい思いをこの
たああっぷり、反省しなさい。
反省したら次はもっと頑張るものね。
ほら、お尻叩きの最中はお尻をもっと上向きにして、
小さい頃からずっとう教えてきたでございませぬ。」





僕は、
「小さいころからああだったんだって（笑）」
という声を耳にしながら、姉の言う通り尻を
ぐつと上向きにする。
するとその瞬間、まさに狙い澄ました姉の手が
僕の臀部をぬった打ちにした。





「次はせつつつたいたい、
営業目標を達成することつ
分かったためぬこ」

「ひっく…ひっく…。
ゆか…分かりました…」

「もうこ
そんじやあ、さつき追加罰を
言い渡さないためこ」

「…うう…、そんな」

「も
ア」



「今日から毎日、朝礼の時
貴方はお尻を出して参加しなさい。
お尻の赤みが出たら、
その都度、お尻叩きをしてきたら、
次期の営業成績が出るまでお尻叩きは
ずつつつと続けるわよ」

「……うう……、そんな……」

「あ、それからお尻叩きさせられた日の
午前中は外回り行かなくても良いわよ」

「……」

「お尻出したまま、オフィスで立ってなさい」

「……」

「……」

「お尻丸出しの姿を見らえて、
真ッ赤に腫れ上がったお尻を見らえて、
他の社員にたつぷり……、
たつぷつぷつぷり笑ってもらいなさい。
分かったわね？」

「もちろん、今日もそのままの格好で立っ
ていてもらうわよ。」

壁の前に立ちなさい。

真つ赤なお尻を、他の人がさくさくさくさく
じつじつじつじつじつじつ見やるまじい、

こっち側に背中を向けて立つのよ。

両手は背中組んで。

ワイシャツは……お尻にでも挟んでおきなさい。
じやないと、お尻が隠れちゃうぞじやない。」